

2024/3/30

## 思想と政策の関係について —れいわ新選組の政策を対象として—

谷 誠

先日、思想と政策の関係の重要性のご指摘をある方から受けたので、これに関して考え方をまとめてみました。

拙著「矛盾の水害対策」では、防災施設を含む社会的共通資本整備に関して、「改良追及」を控え、「維持回復」優先する思想的な基本視点を提起しました。れいわ新選組の主張する積極財政に関しても、それは、災害や貧困や戦争などによって現在苦境にあえぐ方々を救うことを優先して行うべきであって、温暖化で規模拡大する豪雨条件をふまえて今よりももっとインフラを増強することは、「ちょっと待ってほしい」といえるかたちでの政策が重要だと考えます。

「矛盾の水害対策」では、その思想背景として、次のように考えてきました。

1) 太陽系惑星としての地球と生命を持つ生物との相互作用のネットワークが、遺伝子の複製原理を基にする進化を通じて生態系として成立していて、人間もその支配受けざるを得ない。

2) しかし、人間の歴史は、真木悠介（＝見田宗介）「自我の起源」（岩波現代文庫）が指摘するように「個体が遺伝子から主体性を奪い、主体性を個体自体のものとして確立する」ように歴史を刻んでいる。

3) その結果、農村などの共同体での自分の役割を守って生きる不自由さは、「選択の自由」を通じて資本主義経済による無限の欲求追及を生み出したが、それと同時に、「人はそのまま個性を活かして生きてよい」との人権重視の考え方も生み出した。両者とも、遺伝子の原理が生み出す「短期間の定常性」と「長期間での進化」（それぞれの生物種は変動はあっても安定した状態を維持するが、長い時間スケールでは進化をしてゆく）と対立していて、非定常な変化（短期間でどんどん変わってゆくこと）をもたらす。そのため、人口増大・活動拡大が起こってしまい、現代のような地球限界点越えをもたらしてしまった。（人権重視が絶対的に重要ですが、世界中の人々の人権を平等に守ることが、地球限界を考えたときに、いかにむずかしいことか、と考えざるを得ません）

4) 個体の選択の自由と人権重視の両方を維持するような、自然科学的な相互作用の定常性（に近い状態）を達成すること、これはきわめて困難であるが、最低限必要な重要ポイントは、このこと自体を認識する人々が増えてゆくことだと考えられる。

見田宗介、大澤真幸、柄谷行人、斉藤幸平各氏は、将来のイメージを提示しているわけですが、社会主義の崩壊を経てきた現在では、現状の分析を基に将来を描く「絵に描いた餅」の危険性も意識されていると思います。人類社会が非定常性によって粛々と破綻に向かい、

絶滅を待つという暗い想定もあるわけなので、どうやってこの悲惨な流れをくいとめるか、そういう意識そのものが多くの人々に醸成されてゆくことで、数百年後にどうなるか？ということ以上には、100年未満の寿命限界のある我々には、「思想的に越えることはできない」ように思います。

しかし、政策においては、このような悠長な時間スケールでの「思想」を語っているだけではいけないのは当然です。なので、すでに、人間活動の拡大が地球生態系の処理の限界点に達している以上、私は、「改良追及を控えて維持回復を優先する」社会的共通資本の整備方針を政策として提案しているわけです。

ところで、無限により良いものを求める欲求によって生じる資源枯渇や地球環境の問題は、資本主義経済によって起こったもので、世界的な難題であるわけですが、加えて日本に特有な、社会的共通資本整備にともなう問題として、「合意形成の機能不全」があります。

原発や軍事基地やダムやリニア新幹線や万博など、経済発展を旗頭に一度開始された事業は、利害関係者の合意形成を待たずに推進されてゆく問題が、日本では目立ちます。「矛盾の水害対策」では、国などの事業者と住民などの利害関係者と多様な分野の学者（哲なんとかムラに限定しない学者なども含む有識者）による時間制限のない議論を設けることを提案しています。これが機能不全に陥っている問題は、江戸時代の「里山循環モデル」にまでさかのぼって考える必要があり、詳しくは下記をご参照いただきたいと思います。

<https://hakulan.com/wp/wp-content/uploads/2024/03/Consensus.pdf>

私は、れいわ新選組の政策を支持します。そのうえで、長い目で見たとき、思想面で、多くの人々が、すでに4)で述べたように、「個体の選択の自由と人権重視の両方を維持するような、自然科学的な相互作用の定常性（に近い状態）を達成すること、これはきわめて困難であることを認識共有することが重要だと考えています。